

# 書 評

上杉和央 著

『地図から読む江戸時代』

筑摩書房 2015年9月 234頁 940円＋税

本書では、江戸時代に作製された日本図やその作製に携わった人々に焦点を当て、日本の「かたち」、すなわち日本の輪郭について概観している。

日本図に関する著作は多数あり、絵図に描かれた日本の周縁をめぐる研究、あるいは絵図上における日本の形状をたどる研究は特定の絵図群においてみられる。ただ本書では、江戸時代というやや広い時代設定を行い、幕府や民衆が製作した「日本」全域の地図を扱っている。このような図の全体の流れを見通したものはあまりない。

また、絵図作製者や板元、読者といった人々の動向や交流、認識、趣向などについても言及している。こうした叙述をするために、著者は政治的、社会的、文化的コンテクストを踏まえて日本図を考察することに力点を置く。江戸時代各期の日本図の特徴はもちろん、絵図作製の目的を理解する上でも重要な視角である。

序

第1章 伝統からの脱却

- 1 江戸時代の前提
- 2 中世の日本と世界
- 3 世界のなかの日本

第2章 一七世紀前半の日本像

—交差する流れ—

- 1 日本図史と江戸時代
- 2 中世の残像
- 3 幕府の日本図

第3章 江戸時代中期の日本図

—流宣図インパクト—

- 1 旅の時代
- 2 流布する日本像の変化
- 3 さかさまの世界
- 4 流宣日本図の時代

第4章 地図を正す

- 1 「美しさ」の裏側で
- 2 「正しさ」という評価軸

第5章 新たな日本像の展開

- 1 刷られた「正しさ」
- 2 伊能図のもたらしたもの

むすびに —江戸時代の日本図と日本像—

本書は、以上のような構成をとっている。

序章では、研究目的についてまとめられている。著者は、江戸時代の日本図を題材に、日本をめぐる地理認識や地図表現の流れを汲みとることを目的として設定し、研究とは無縁の読者のために、地図を解説する視点として、①正しさ／科学性（地図の正確性）、②詳しさ（地図情報の充実度）、③実用性、④機能性（地図の形態）、⑤美しさ／芸術性、⑥思想性／宗教性（観点）、⑦社会性（人々への影響）の7つの指標を設けた。以下、この指標をもとに、話が展開されている。

本論に入る前に、第1章では14～16世紀ごろの行基式日本図の思想と、世界図における日本の表現方法について検証する。また、中世日本に広まっていた仏教系世界図と行基式日本図の世界観の相違にも注目している。

著者は旧国を「くに」と表現している。その上で、行基式日本図の「くに」の表現に関しては、それまで「くに」そのものの形状が述べられるにとどまっていたが、行基式日本図では「くに」を積み重ねて形成された「くに」の集合体をもって日本が構成されている点に特徴があるとする。

15・16世紀の日本においては、行基式日本図の描画作法が大きな影響力を有していたが、海外との交易が盛んになった16世紀後半になると、日本の輪郭ともいえる海岸線を描き、後から「くに」が分割される手法に変化すると、著者は指摘する。さらに、海岸線や島の表現が細かくなり、海からのまなざしで日本の「かたち」が表現される。

こうした傾向に対し、江戸時代の日本図では陸側の視点が中心となり、陸地に関する記述が増加していく。第2章以降では、江戸時代以降が対象となるという。

江戸時代の日本図は、幕府作製の絵図と出版された日本図の2種に大別できる。著者によれば、寛文期に、両者の情報が交差した日本図（「家光枕

屏風」系の日本図)が刊行される。

第2章では、江戸時代前期の幕府作製の絵図と出版日本図の情報が交差するまでの過程が整理される。ここでは、江戸幕府が調製に関わった日本図7種のうち寛永日本図(A型・B型)、正保日本図(初回図)の3種が検討されている。これらはいずれも家光期に集中して作られており、その理由を解明するためである。

寛永日本図A型は、行基式日本図と同じく「くに」を1つ1つ描き、その積み重ねをもって日本とする表現形式をとっている。幕府がこのような方法をとったのは、著者は古代以来の国郡制を意識しているからだとし、ここに律令国家に倣って統治しようとした幕府の思想性をみている。

寛永日本図B型の系統である「家光枕屏風」は芸術性を重視した図であるがゆえに、「かたち」は実態を反映したものにはならなかったという。

寛永日本図A型の後に、立て続けに寛永日本図B型、正保日本図が作製された理由を、著者は「日本」「日本人」を想像/創造する試みの1つとして考察を試みた。その結果、禁教や海禁といった「日本」を想像/創造する政策が展開されるなかで、これらの図が調製されたと説明した。幕府が作製した日本図と同様、出版日本図も「日本」を想像/創造できる役割を有していたことも付け加えられている。ただし、両者の日本の「かたち」は相違していたことが強調される。

江戸時代前期に出版された日本図は、作製時期により、その内容の変化はみられるものの、行基式日本図の影響が残っていたとし、著者は、現存する日本図のうち、最古の出版日本図と位置づけられる図について考証した。従来は『大日本国地震之図』とされてきたが、この図は地震図であり、出版意図や流布の背景を見落としているとして、これを退けた。代わりに3つの図(『南瞻部洲大日本国正統図』(東京大学附属図書館蔵)、『行基菩薩説大日本国図』(神戸市立博物館ほか蔵)、『日本国之図』(京都大学附属図書館蔵))を候補にあげた。いずれも「くに」の集合体として日本を描くという特徴がある。

第3章では、文化の成熟がみられた17世紀後半から18世紀中頃までの出版日本図の流れを文化・社会の動向と合わせつつとらえようとした。あわせて、地図の向きについても言及した。

「家光枕屏風」系の流れを汲んだ図が出版日本図として登場するのは、17世紀後半のことである。『扶桑国之図』(寛文2(1662)年)は「家光枕屏風」系の出版日本図であり、「美しさ」が追究される嚆矢となる図として位置づけた。また、『新撰大日本図鑑』は大名に関する情報が含まれており、「実用性」/「詳しさ」が求められる中で生まれた図と解される。

石川流宣の『本朝図鑑綱目』(貞享4(1687)年)や『日本海山潮陸図』(元禄4(1691)年)は「美しさ」と「実用性」/「詳しさ」を兼ね備えた図であり、多くの地理情報を書きこむために、大型な地図と化した。これらの地図は板元や地図名を変えながら、約90年にわたり刊行され、日本国内外に大きな影響を与えた。このように「美しさ」を特徴とする流宣日本図が長期にわたりもてはやされたのは、流宣自身が当時流行していた浮世草子、浮世絵に精通していたからだとし、流宣を高く評価している。

17世紀後半から18世紀にかけては「正しさ」と「美しさ」の対立が表面化する。この対立は作図者だけでなく、板元の販売戦略にも関わるものであったとも指摘している。

ところで、流宣日本図以前は地図の向き(マップオリエンテーション)は多様であったが、流宣日本図の刊行以後、地図の上を北とする考えが定着したという。これは流宣日本図のイメージが社会に根付いた結果であるとした。さらに、流宣日本図では、琉球が異国や異域と同様に扱われている点も注目される。

第4章では、流宣が軽視した「正しさ」が、時間の経過とともに求められるようになる経緯が探られる。18世紀中頃以降は、知識人を中心に「正しさ」と「詳しさ」を尊重する日本図が模索される時期と位置づけられる。その事例として、元禄期・享保期の幕府作製の日本図、森幸安や小津栄貞(後の本居宣長)の日本図が紹介された。

この時期には、武士や町人の上層を中心とした知識人の中で博物趣味が流行しており、「正しさ」と「詳しさ」を視覚化したモノを収集し、それを所持することが好まれた(「収集文化」)。それゆえ「正しさ」と「詳しさ」の両方をあわせもつ地図が希求されたのだと説いた。

森幸安、小津栄貞、徳川吉宗などは、すでにあ

る情報の取捨選択を行いながら、「正しさ」と「詳しさ」を兼ね備えた地図を描こうとした。なお、徳川吉宗や森幸安は地図だけでなく、地誌にも関心があったという。森幸安に関しては「歴史的スケールと空間的スケールを組み合わせる」「日本」をあぶりだすという計画を実行に移した」最初の人物として評した。

第5章では、「正しさ」と「詳しさ」を有した図として、赤水図と伊能図がとりあげられる。

流宣日本図に代わる出版日本図は赤水日本図となる。森幸安と長久保赤水の日本図には、経緯線の記載がみられるという共通点があることから、幸安と赤水を結ぶ交友ネットワークが赤水に情報を提供した可能性を示唆した。赤水の名声が高く、江戸後期には広く受け入れられたことにも触れた。

地政学的な観点から幕府によってバックアップされた伊能図の詳しさは、海岸線や街道筋に限ったものであり、日本の内陸部を詳細に描くことではなかった。日本の輪郭でもある海岸線のみを描いた表現方法は、「くに」ではなく日本全体の「国」を意識した手法である。

また、伊能図では、蝦夷地に関しては間宮林蔵による測量の成果が反映されている一方で、琉球は社会全体の関心が低かったため描かれなかった。

終章では、本書全体の流れがまとめられている。全体を通して、著者は地図を題材にして江戸時代の社会を読み解くことは有効な手段であるとした。なお、江戸時代中期の「美しさ」を嗜好する動きは、その後も衰えることがなかったとして、くわがたけいさい 鋏形蕙斎、葛飾北斎、吉田初三郎を引き合いに出している。明治時代以降は、伊能図のような「正確さ」をとことん追求した図と、初三郎のような芸術性、実用性を兼ね備えた図が「近代の日本図の波」を形成しているとして、次期への流れにつなげつつ、話を締めくくっている。

このように、本書では著者のこれまでの研究や知見、最新の研究を織り交ぜつつ、話が展開されている。研究者間で議論されてきた内容が新書という形で一般の読者に還元されたという点で、本書の意義は大きい。また、序章に設けた7つの指標は道先案内の役割を果たし、話の筋をわかりやすくする工夫がなされている。

出版日本図、あるいは知識人と地図との関係については、著者が意欲的に進めてきた分野であ

り、前著『江戸と知識人と地図』（京都大学学術出版会）での成果も活かされている。

本書を通読して感じられることは、地図の流れを区切ることの困難さである。著者も「むすびに」においてその点について触れている。「日本図の歴史は、一つの流行が完全に収束してから次の流行が始まるというのではなく、一つの時代が続いている間に次なる時代の予兆が生まれ、成長するのであり、それが時代の変化を連続的なものにしてきた」とし、人々がこれを受け入れる様子を「波」という言葉を用いて表現している。日本図の展開を、「波」が次々と生まれ、入れ替わる連続的なものとしてとらえた。そして、著者は、この「波」のピークをもって、江戸時代の日本図を「行基式日本図の時代」「流宣日本図の時代」「赤水日本図の時代」と3つの時期に大別している。連続する「波」を、歴史的な時間の区分を意味する「時代」という言葉で話をまとめていることに対しては、やや違和感を覚える。

また、著者はB.アンダーソンの『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや訳、書籍工房早川）を意識し、本書では「想像の共同体」と地図との関係について言及されている箇所がいくつかみられるが、知識人が表象された空間からいかなる日本を想像／創造し、自分たちのアイデンティティーを形成したのかについては説明がなされていない。もしお分かりになればご教示いただきたい。

しかしながら、本書において近代に至るまでの日本の「かたち」の変遷が明らかになったことで、近世に作られた絵図から近代に作られる地図への繋がりが鮮明になった。著者が述べているように、伊能図は江戸時代よりも明治時代から戦前にかけて大きな影響を与え、伊能図を基にした『大日本全図』（明治10（1877）年）や『大日本国全図』（明治13（1880）年）などの日本図が刊行された（第5章）。その一方で、伊能図では海岸線や街道筋に限って測量されているが、内陸部に関しては詳細な測量がなされておらず、不明瞭なままである。こうした不完全さは、近代以降の課題とされ、取り組まれていくことになる。

紙幅の都合上、本書において書ききれなかったことについては、次なる著作に期待したい。

（喜多祐子）